

畑作・野菜・花き生産情報 第2号

令和2年5月19日
青森県「攻めの農林水産業」推進本部



◎小麦の出穂期は平年より早まっています。赤かび病の適期防除に努めましょう！

◎大豆の排水対策・土壌酸度矯正・砕土を徹底しましょう！

◎野菜の生育はおおむね順調です。適正な栽培管理を徹底しましょう！

◎施設内の温度変化が激しい時期です。適正な栽培管理により高品質な花きの生産に努めましょう！

畑作物

1 小麦

(1) 生育状況（5月10日現在）

ア 草丈は、全体的に平年をかなり上回っている。茎数は、ネバリゴシで十和田市が平年を上回っているものの、その他では平年並みからかなり下回っている。

イ 出穂期は、平年より5～8日早い。

ウ 上位葉にうどんこ病が散見される。

表－1 小麦の越冬後の生育状況（5月10日現在）

場 所	年次	ネバリゴシ				キタカミコムギ			
		草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	止葉抽期 (月/日)	出穂期 (月/日)	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	止葉抽期 (月/日)	出穂期 (月/日)
農林総合 研究所 (黒石市)	本年	56.0	568	5/7	5/13	59.7	421	5/8	5/16
	平年差比	(122%)	(91%)	(早6日)	(早8日)	(118%)	(70%)	(早6日)	(早7日)
	平年	45.9	627	5/13	5/21	50.8	598	5/14	5/23
	前年	45.3	657	5/13	5/19	48.2	597	5/14	5/21
野菜 研究所 (六戸町)	本年	69.1	887	5/6	5/14	/			
	平年差比	(118%)	(100%)	(早5日)	(早6日)				
	平年	58.7	887	5/11	5/20				
	前年	50.9	828	5/13	5/20				
つがる市 (木造)	本年	73.1	610	5/4	5/14	70.2	482	5/7	5/16
	平年差比	(135%)	(99%)	(早6日)	(早6日)	(118%)	(90%)	(早5日)	(早5日)
	平年	54.3	617	5/10	5/20	59.4	535	5/12	5/21
	前年	55.6	516	5/7	5/17	58.7	580	5/10	5/19
十和田市 (相坂)	本年	58.0	1,073	5/7	5/16	/			
	平年差比	(125%)	(129%)	(早5日)	(早7日)				
	平年	46.5	830	5/12	5/23				
	前年	53.8	913	5/12	5/20				

- 注) ①農林総合研究所、野菜研究所が作況試験ほ、つがる市(木造)、十和田市(相坂)が生育観測ほの調査成績。
 ②平年値は、農林総合研究所の「ネバリゴシ」、「キタカミコムギ」が過去14か年、野菜研究所の「ネバリゴシ」が過去11か年(24年産(出芽不良)を除く)、つがる市(木造)と十和田市(相坂)の「ネバリゴシ」が過去18か年(十和田市の止葉抽出期は過去4か年)、つがる市(木造)の「キタカミコムギ」が過去24か年の平均値。
 ③本年の調査日は、5月11日。
 ④出穂期は、5月18日時点。

(2) 今後の留意点

- ア うどんこ病の防除は、病斑が止葉直下葉に発生した直後に薬剤散布を行うと効果的である。ただし、アミスター20フロアブルは、出穂後に使用すると、赤かび病のカビ毒汚染低減効果が劣る事例があるため、別の薬剤を使用する。
 イ 赤かび病は、収量や品質の低下をもたらすばかりでなく、カビ毒を含むため、赤かび粒の混入割合が1万粒に4粒を超えると流通できなくなる。
 ウ 防除は、開花始めから開花期に1回目の防除を行い、その7日後に2回目の防除を行う。2回目の防除後、天候不順が続く蔓延のおそれがある場合は追加防除を行う。
 エ 湿害防止のため、排水口や明きよの点検補修を行い、ほ場の排水に努める。
 オ 今後の登熟状況に注意し、適期収穫に備える。

2 大豆

(1) ほ場の準備

ア 排水対策

湿害による出芽不良やその後の生育不良を防ぐため、排水対策はしっかり行う。ほ場の周辺及び内部に明きよ(深さ30cm程度の排水溝)を掘り、排水路に確実につなぐ。

排水不良のほ場では、弾丸暗きよや心土破碎などの排水対策も組み合わせる。

イ 土づくり

大豆の生育に適した土壌酸度はpH6.0~6.5である。酸性の強いほ場や水田転換畑では生育不良や根粒菌の活性低下を招くため、苦土石灰などで酸度矯正する。

有機物や土づくり肥料の施用により地力の向上を図る。

ウ 耕起・砕土

出芽・苗立ちの確保や除草剤の効果を高めるため、耕起・砕土は丁寧に行い、砕土率(土塊の大きさ2cm以下)70%以上を確保する。

エ 施肥

施肥方法は、原則として全量基肥とし、施肥量は表-2を参考とする。

初めて作付けする水田転換畑では、は種直前に根粒菌の種子粉衣で着生を促す。

表-2 施肥基準(10a当たり成分量、kg)

品種	窒素	りん酸	加里
中晩生種	2~3	10~15	8~10

中生種:「おおすず」、晩生種:「オクシロメ」

(2) 種子の準備

ア は種時期

「おおすず」は5月中旬から下旬がは種適期である。

イ は種量

作付面積の拡大や、は種時の天候不順などにより、適期よりも遅くは種せざるを得ない場合は、うね幅を慣行の半分程度に狭めた晩播狭畦栽培とする。遅くなるに従って、は種量を多くして栽植本数を確保する。

ウ 種子消毒

紫斑病、虫害対策として種子消毒を行う。

表-3 「おおすず」のは種時期及びは種量

は種期		うね幅 (cm)	栽植本数 (本/10a)	は種量 (kg/10a)
5月中旬～下旬		60～80	20,000程度	7～8
5月下旬～6月上旬		60～80	20,000～30,000	7～12
晩播 狭畦	6月中旬～下旬	30～40	25,000	9～10
	7月上旬～中旬	30～40	25,000～30,000	9～12

(4) は種方法

は種はロータリシーダなどで行い、は種深度は3～4cmとする。

(5) 雑草防除

土壌処理剤の散布は、は種後速やかに行う。

野 菜

1 にんにく

(1) 生育状況

ア りん片分化期は、平年並みから10日早く到達した。生育は、六戸町、藤崎町、七戸町では平年を上回っており、順調である。田子町ではマルチをグリーンから黒に変えたこと等もあり、草丈、葉数、茎径ともに平年を下回っている。

イ 春腐病、さび病の発生が見られる。

表－４ にんにくの生育状況（５月10日現在）

場 所	年次	草 丈 (cm)	葉 数 (枚)	茎 径 (mm)	りん片 分化期 (月日)	収穫期 (月日)	備 考
野菜研究所 (六戸町)	本年 (平比)	93.2 (115%)	12.4 (117%)	21.8 (112%)	4/11 10日早	－ (－)	透明マルチ
	平年	80.7	10.6	19.5	4/21	7/ 1	
	前年	90.5	12.0	20.3	4/20	6/20	
藤 崎 町 福 島 (旧常盤村)	本年 (平比)	63.6 (116%)	8.7 (132%)	19.3 (111%)	4/29 ±0日	－ (－)	無マルチ (平年、前年の 品種は福地ホワ イト)
	平年	54.8	6.6	17.4	4/29	7/ 2	
	前年	54.1	6.8	16.6	4/30	6/30	
七 戸 町 榎 林 (旧天間林村)	本年 (平比)	72.7 (117%)	7.6 (103%)	22.3 (123%)	4/16 8日早	－ (－)	グリーンマルチ
	平年	61.9	7.4	18.1	4/24	6/27	
	前年	65.4	7.8	20.1	4/23	6/20	
田 子 町 田 子	本年 (平比)	56.8 (90%)	6.9 (90%)	16.0 (89%)	4/20 3日早	－ (－)	黒マルチ (前年まではグ リーンマルチ)
	平年	62.8	7.7	17.9	4/23	6/28	
	前年	65.3	7.7	15.9	4/21	6/26	

注) ①平年：野菜研究所は平成22～31年（令和元年）の10か年の平均値

藤崎町は平成9年～31年（令和元年）の23か年の平均値（品種が前年まで福地ホワイトのため、参考値）

七戸町は平成8年～31年（令和元年）（平成25年を除く）の23か年の平均値

田子町は平成8年～31年（令和元年）の24か年の平均値（マルチが前年までグリーンマルチのため、参考値）

②種子：野菜研究所は福地ホワイト（13～14g）、藤崎町は白玉王（13～15g）、七戸町は白玉王（14g）、田子町は白玉王（10～12g）

③葉数：野菜研究所は抽出葉数、藤崎町、七戸町、田子町は生葉数

④調査日：本年は5月11日現在

(2) 今後の農作業の留意点

ア 今後の見通し

向こう1か月の天候の見通し（5月14日気象庁発表）では、気温は平年並みか低く、降水量は平年並みか多い、日照時間は平年並みか少ない予報であることから、今後の生育は平年並みからやや早まると見込まれる。

イ 病虫害の適期防除

(ア) 春腐病は、降雨や濃霧が続くと急増するので、天気予報で3～4日曇雨天が続くと予想される場合には、降雨前の予防散布を徹底する。また、腐敗が進行している株は伝染源となるので見つけ次第抜き取る。

(イ) さび病が発生しているほ場では、効果持続期間が長い薬剤を散布して、病勢の進展を抑える。

(ウ) 葉枯病、黄斑病、白斑葉枯病、ネギコガなどは、ほ場を見回り、早期発見・早期防除を徹底する。

ウ とうの摘み取り

抽だいが始まったら、随時とうを摘み取り、球の肥大を促す。とうの摘み取りは、珠芽が葉鞘から完全に抜け出してから行う。

2 ながいも

(1) 今後の農作業の留意点

ア 普通栽培の植付適期は5月中旬～6月上旬なので、計画的に植え付ける。

ただし、切いもの場合は、地温が低いと種いもの腐敗を招きやすいため、地温15℃以上を確保できる5月下旬～6月上旬に植え付ける。

イ 覆土は、植付け後速やかに6cm程度の厚さで行う。2～3週間後に、さらに6cm程度培土し、植付けの深さは12cm程度とする。

ウ 頂芽付小型1年子の早植栽培（4月下旬～5月上旬植付け）の基肥は、萌芽期（萌芽が50%の頃）に、窒素成分で10a当たり6～10kg施用する。

3 春夏にんじん

(1) 生育状況

ア 生育は、葉数が平年より少ないものの、草丈、地下部ともに平年を上回っており、順調である。

イ 病害虫の発生はみられない。

表－5 春夏にんじんの生育状況（5月10日現在）

場 所	年次	は種期 (月日)	葉 長 (cm)	葉 数 (枚)	根 長 (cm)	根 径 (mm)	根 重 (g)	備 考
六 戸 町 (犬落瀬)	本年 (平年比)	3/12 3日早	22.9 (123%)	4.3 (88%)	15.8 (115%)	9.6 (110%)	3.6 (104%)	透明ポリ トンネル
	平年	3/15	18.6	4.9	13.8	8.7	3.5	
	前年	3/ 5	21.0	5.8	15.3	11.1	5.2	

注) ①平年：平成22年～31年（令和元年）の10か年の平均値

②品種：彩誉7

③調査日：本年は5月11日現在

④第1号で報告したほ場は生育不良のため、場所とは種期を変更している。

(2) 今後の農作業の留意点

ア 間引き

トンネル栽培では本葉5～6枚時まで、べたがけ栽培では本葉3～4枚時までには1本立てとし、次の①～⑤の株は間引きする。

- ① 葉色が濃すぎるもの
- ② 葉が粗剛で刻みの大きいもの
- ③ 葉数が多すぎるもの
- ④ 生育が極端に良すぎるもの、または悪いもの
- ⑤ 病害虫の被害があるもの

イ 温度管理

(ア) トンネル栽培では、高温障害を防ぐために温度管理を徹底する。

- ① 4葉期まで：30℃以下

- ② 5葉期～：25℃以下
- ③ 5月下旬：順化（褌、裾は開けたまま）
- ④ 6月上旬：除覆（平均気温15℃以上）

（イ）べたがけ栽培では、本葉5～6枚時を目安に除覆する。ただし、この時期に低温が予想される場合は、本葉7枚頃まで除覆せず保温に努める。

ウ 追肥

（ア）トンネル栽培では、本葉5～6枚時に、窒素、加里とも成分で10a当たり3kg程度の追肥を行う。

（イ）べたがけ栽培では、本葉3～4枚時に、窒素、加里とも成分で10a当たり3kg程度を追肥し、本葉5～6枚時にも同様に行う。

4 春だいこん

（1）生育状況

ア 4月の気温が低く推移したため、地上部、地下部ともに平年を大幅に下回り、生育は遅れている。

イ 病害虫の発生はみられない。

表－6 春だいこんの生育状況（5月10日現在）

場 所	年次	は種期 (月日)	葉 長 (cm)	葉 数 (枚)	根 重 (g)	備 考
おいらせ町 (内山平)	本年	3/22	26.3	17.6	167	透明ポリマルチ＋ 透明ポリトンネル
	(平比)	2日遅	(72%)	(83%)	(74%)	
	平年	3/20	36.4	21.2	226	
	前年	3/18	34.1	22.9	251	

注) ①平年：平成22年～31年（令和元年）の10か年の平均値

②品種：春の星

③調査日：本年は5月11日現在

（2）今後の農作業の留意点

ア 収穫

根部の肥大状況を確認しながら適期に収穫する。

イ 病害虫防除

例年、キスジノミハムシの発生が見られるほ場では、トンネル除去後、早めに防除する。また、ナモグリバエ、コナガなどの早期発見・早期防除に努める。

5 ばれいしょ

（1）生育状況

植付期は平年より11日早かったものの、4月は気温が低く推移したため、萌芽期は平年より5日遅く、生育も草丈、茎数ともに平年を大幅に下回っている。

表-7 ばれいしょの生育状況（5月10日現在）

場 所	年次	植付期 (月日)	萌芽期 (月日)	草 丈 (cm)	茎 数 (本)
三 沢 市 (庭 構)	本年 (平年比)	3/27 11日早	5/ 9 5日遅	7.0 (56%)	1.7 (71%)
	平年	4/ 7	5/ 4	12.5	2.4
	前年	4/ 6	5/ 5	10.2	2.5

注) ①平年：平成19年、平成21年～24年、平成26～31年（令和元年）の11か年の平均値。

②萌芽期の平年：平成21年～24年、平成26～31年（令和元年）の10か年の平均値。

③品種：メークイン

④調査日：本年は5月11日現在

(2) 今後の農作業の留意点

ア 培土と追肥

1回目の中耕・培土は、草丈10cm頃を目安に行う。2回目は、着蕾期（40～50%の株が蕾を着ける時期）に窒素成分で10 a 当たり 4～5 kgを追肥してから行う。

イ 病虫害防除

6月中旬以降になると病虫害が発生しやすくなるので、早期発見・早期防除に努める。

なお、疫病の防除は予防散布を徹底するとともに、同一薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤をローテーション散布する。

6 メロン

(1) 生育状況等

トンネル栽培（4月下旬～5月上旬定植）では、定植作業は平年並みに進み、定植後の活着は良好で、生育は順調である。

(2) 今後の農作業の留意点

ア 温度管理

トンネル内の温度は15～30℃を目標に換気し、雌花の確保と生育促進に努める。

イ かん水

乾燥による生育抑制が懸念されるほ場では、かん水に努める。

ウ 整枝・着果

(ア) 子づる2本仕立てとし、うねと直角方向に誘引する。着果節位は子づるの10～15節とし、子づる1本当たり3～4果連続で着果させる。子づるは22～25節前後で摘心する。

(イ) 孫づる(わき芽)は、着果節位までは早めに全てを除去し、着果節位の孫づるは、開花期前後に1～2葉残して摘心する。着果節位より上の孫づるは、順調な生育状態では全て除去するが、草勢が弱い場合は1葉を残して摘心する。つる先の2～3本は、生育調節のために残しておく。

エ 交 配

着果節の開花7日前までにミツバチの巣箱を畑に設置し、蜂の訪花活動を促す。蜂の動きが活発でないときは人工交配を行う。人工交配は、雄花の花粉を直接または筆で雌花の柱頭に軽く付ける。また、天候不順の場合はホルモン処理を併用する。

オ 摘 果

果実が鶏卵大（着果後7～10日）の頃に、形状の良いものを子づる1本当たり2果残す。

花 き

1 夏秋ギク

(1) 生育状況

4月定植の生育はおおむね順調である。
全般に病害虫の発生は少ない。

表1 定植月日

場 所	年 次	品 種	定植月日	栽植本数	仕立て方法
新 郷 村	本 年	精の一世	4月27日	3,791本/a	1本仕立て
五所川原市	本 年	岩の白扇	4月15日	4,400本/a	2本仕立て
	前 年	岩の白扇	4月18日	4,400本/a	2本仕立て

(注) 平年値：新郷村は本年から調査場所の変更によりなし
五所川原市は平成30年から調査場所の変更によりなし
定植月日：新郷村は直挿し、五所川原市は挿し苗の定植

(2) 今後の作業

ア 芽かき

頂芽の花芽ができて5～7日経過するとわき芽が伸びてくるので、切り花品質向上のため小さいうちにかき取る。

イ 温度管理

花芽分化を安定させるため、日中25℃、夜間15℃を目標に管理する。

ウ 病害虫防除

白さび病やアブラムシ類、アザミウマ類、ハモグリバエ類が多発する時期なので、過湿や多肥を避け、早期発見・早期防除に努める。

2 秋ギク

(1) 今後の作業

ア 苗の養成

採穂に当たっては、太さが揃い充実したものを選択し、展開葉5枚程度、長さ5～6cm程度に調整して、2cm×2cm程度の間隔でさし芽を行う。

イ 定植床の準備

- ① 10月出荷の作型は、6月上旬～下旬に定植できるように、計画的に作業を進める。
- ② 土壌pHの矯正及び基肥の施用は定植2週間前までに行い、土に十分なじませておく。
- ③ 初期の水分不足は、生育の遅れを招くので、定植の数日前に十分かん水しておく。

ウ 定植

- ① 苗は、1～2cm程度発根したものを定植する。
- ② 定植した後に、軽かん水して活着を促進する。

エ 定植後の温度管理

日中は25℃以上にならないように管理する。

3 トルコギキョウ

(1) 生育状況

春定植栽培の生育はおおむね順調である。

全般に病害虫の発生は少ない。

表2 定植月日

場所	年次	品種	は種日	定植月日	栽植本数
青森市	本年	北斗星	2月4日	4月7日	3,333本/a
	前年	北斗星	1月16日	3月30日	3,333本/a
	平年	—	—	—	3,333本/a
田舎館村	本年	ボヤジピンク	2月22日	4月22日	2,800本/a
	前年	セルフピンク	2月25日	4月24日	2,870本/a
	平年	—	—	—	2,794本/a

(注) 青森市の平年値：昨年から品種が変更されたため、平年値なし

田舎館村の平年値：本年から品種が変更されたため、平年値なし

(2) 今後の作業

ア 定植

- ① 老化苗は生育が劣るので、展開葉4枚までの苗を定植する。
- ② 定植の際は深植えとせず、株元を強く押さえないようにする。定植後は、苗と土をなじませる程度に軽かん水する。
- ③ 9～10月出荷の作型は6月下旬頃までに定植する。

イ かん水

発らいまでは乾燥させないように適宜かん水する。

ウ 温度管理

気温が25℃以上になると生育の停滞やロゼットの要因となるので、換気等による

温度管理を徹底する。

エ 追肥

生育の状況を見ながら、発らい期頃までに液肥で追肥を行う。

オ 病虫害防除

立枯性病害は、多肥や過湿の条件で発生しやすいので、施肥、換気、かん水などの管理を適正に行うとともに、病気の蔓延を防ぐため発病株の抜き取り処分を徹底する。

4 土づくり

施設栽培のほ場では、肥料成分の過剰蓄積が見られるため、ほ場の準備に当たっては、土壌診断に基づき減肥するなど適正な施肥を行う。

畑作・野菜・花き生産情報第3号は令和2年6月18日発行の予定です。

◎メロンやいちごなどの園芸作物で、花粉交配用ミツバチが確保できない場合は、各地域県民局地域農林水産部まで御相談ください。

◎決め手は土づくり！ 日本一健康な土づくり運動展開中！

ほ場の準備に当たっては、土壌診断に基づいた土づくりに努めましょう。

◎令和2年度青森県農薬危害防止運動展開中（5月1日～8月31日）

農薬を使用する前には必ず最新の農薬登録内容を確認し、使用基準を守って使用しましょう。また、散布の際は周囲に飛散させないよう細心の注意を払いましょう。

クロルピクリン剤など土壌くん蒸剤を使用する際は、住宅、畜舎等に近接する農地での使用は避け、薬剤の施用後は速やかにシート（厚さ0.03mm以上または難透過性の資材）で被覆しましょう。

市販されている除草剤のうち、「非農耕地専用除草剤」は、農作物等の栽培管理に使用できないので、注意しましょう。

農薬情報(http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/)

農薬登録情報提供システム

【詳細検索】(<http://www.acis.famic.go.jp/search/vtllp301.jsp>)

【作物名検索】(<http://www.acis.famic.go.jp/search/vtllp101.jsp>)

◎食中毒を防ぐため、生産段階から「野菜の衛生管理」に努めましょう。

1 栽培に使用する水の衛生管理や水質の確保に努めましょう。

2 家畜ふん堆肥は、水分調整や定期的な切り返しを行い、十分発酵させましょう。

家畜ふん中の菌の死滅には、55℃以上の温度が3日以上続いている状態が必要です。

堆肥の製造工程では、この温度条件を確認しましょう。

3 家畜ふん堆肥を野菜栽培に使用する際は、製造工程や熟成度を確認しましょう。確認できない場合には、堆肥施用から収穫までの期間を、収穫部位が土壌から離れた野菜は2か月以上、土壌に近い野菜は4か月以上空けましょう。

4 農機具や収穫容器等は清潔な状態を保ち、汚水の流入や野生動物の侵入防止等、栽培環境の整備にも努めましょう。

※ 野菜の衛生管理指針、家畜ふん堆肥の生産・利用の注意点はこちら

→ (<http://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/nourin/sanzen/>

[kachikuhunntaihiseizoukanritenminaoshi.html](http://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/nourin/sanzen/kachikuhunntaihiseizoukanritenminaoshi.html))

◎農業保険に加入し、農業経営に万全の備えを！！

農業保険には、農作物共済、園芸施設共済、農業経営収入保険などがあります。自分の経営にあった保険を選択、加入して、自然災害をはじめとしたリスクに備えましょう。

1 農作物共済、畑作物共済

「農作物共済」は水稻・麦を対象として、「畑作物共済」は大豆・ホップを対象として、災害による収穫量の減少に対する損害を補償します。

2 園芸施設共済

「園芸施設共済」はガラス室・プラスチックハウスと附帯施設、施設内農作物を対象として、災害による施設被害と農作物の損害を補償します。

なお、「園芸施設共済」は生産者部会等の集団で加入すると掛金が割引になる等、各種割引メニューがあります。

3 農業経営収入保険

「農業経営収入保険」は、災害による減収に加え、市場価格の低下など農業者の経営努力では回避できない理由により販売収入が減少した場合も補償の対象になる総合的なセーフティネットです。(青色申告の実施が要件)

※ 詳しくは、お近くの農業共済組合までお問い合わせください。

◎春の農作業安全運動を展開中です（4月1日～5月31日）

例年、4～5月は、農作業事故が多くなる時期となっています。体調やまわりの状況を確認し、安全な農作業に努めましょう。

1 慣れた作業でも油断せず、注意して行いましょう。

2 必ず、作業の合間に十分な休憩を取りましょう。

3 自分を過信しすぎず、無理のない作業を行いましょう。

4 一人での作業は避け、やむを得ず一人で作業を行う場合は、家族に作業場所を伝え、携帯電話を持ちましょう。

5 家族や周りの人など、地域全体で注意を呼びかけましょう。

連絡先	農産園芸課 稲作・畑作振興グループ
県庁内線	5073
直通	017-734-9480

	野菜・花き振興グループ
県庁内線	5076
直通	017-734-9485
